

# タンチョウ

*Grus japonensis*

ツル科・十勝では夏鳥(一部越冬)

## 名前の由来

丹は赤のことで、頂は頭の上をさす。頭の上が赤い色なので、タンチョウという名がついた。「ツル」の語源は「列る(つらなる)」からという説、鳴き声から来たという説がある。漢字名：丹頂(別名、丹頂鶴)



タンチョウ

## 特定種

文化財保護法：国指定特別天然記念物  
種の保存法：国内希少野生動植物種

国レッドリスト(2007)：絶滅危惧Ⅱ類(VU)  
北海道レッドデータ：絶滅危惧種(En)

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)140cm。頭頂が赤く、白と黒の大きなツル。ほぼ全身が白く、目の前から長い首にかけてと、翼の後縁が黒い。翼の黒い部分の内より体に近い方(三列風切)は長く、飛んでいないときには黒い尾のように見える。くちばしは黄色く、足は黒い。

声：繁殖期に鳴き声を聞く機会は少ないが、親鳥がヒナを連れ歩いているときに警戒声として「カックルルー」「コ

ロロ」というような声を上げる。幼鳥は「ピーー」と鳴く。秋から春先にかけては(釧路方面で)人里近くにいるため鳴き声がよく聞かれる。夜明けとともに「コロローン、コロローン」とか「クワーオ、クワーオ」とよく響く声で鳴き交わす。

## 生息環境・分布

繁殖地は広い低層湿原(水位の高い湿原)、河川、湖沼、海岸などに接する湿原。越冬期には湿地、耕地、不凍河川、湖沼、干潟に生息するが、多くは給餌場集まる。

分布：アムール川中流域及び沿海地方、中国東北部で繁殖し、朝鮮半島、中国東部(揚子江河口北部など)で越冬する。

国内では北海道道東の湿原に分布。

北海道では留鳥で、道東および国後島、歯舞諸島の湿原で繁殖。越冬は主に鶴居村、阿寒町、音別町、標茶町の給餌場周辺。

十勝地方には夏鳥として3~4月に飛来し、太平洋岸の湖

沼群および十勝川流域の湿地で繁殖する。非繁殖期(11月ごろ)には釧路方面へ渡去するが、越冬するものもいる。



つがいや家族を作っていないタンチョウの小群

## 食性・他生物との関わり

雑食性で湿地に生息するあらゆる動植物を食べる。植物の新芽・葉・種子・果実、穀類のほか昆虫、ミミズ、貝類(タニシなど)、甲殻類、カエル、魚類、小鳥の雛、ネズミも食べる。ゆっくり歩きながら長い首を下げて地上の餌を

ついでむ。また河川や湖沼では水の中を歩き、小魚をくちばしで捕らえる。ヒナのうちはキツネや猛禽類などに捕食されることもある。

営巣地はヨシやスゲ類を主とする湿原。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	一部越冬											
						繁殖						

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類

## 繁殖生態

繁殖期は3～10月で、年に1回、一夫一妻で繁殖する。つがいは一度形成されると、どちらか一方が死ぬまでパートナーを変えることはないと言われていたが、変える場合もある。

繁殖地に向かう前、春先になるとつがいの求愛行動が行われ、向かい合って飛び跳ねたり大声で鳴きあったりする、いわゆる「ツルの舞」が見られる。(→興味深い話の項参照) 営巣地はヨシやスゲ類を主とする湿原。

繁殖地ではつがいに分かれて湿原に分散する。湿原の中の地上に枯れたヨシを積み上げ、大きな皿形の巣をつくる。巣作りはオスメス共同で行われるが、巣材集めはオス、巣の成形はメスという作業分担があるという。

卵は3～4月に2卵を産む。オスメス交代で卵を抱き約1

ヶ月でヒナがかえる。ふ化後3～5日で巣を離れるが、巣にいる間には2羽で激しい突き合いをし、時として殺してしまうこともあるという。ふ化後約100日で飛べるようになるが、翌年の子別れ時期(2～3月頃)まで「ピーピー」と鳴いて親に餌をねだる。(→興味深い話の項参照)



タンチョウのつがい



タンチョウの親子(右端が巣立って間もないヒナ)

## 興味深い話

- 寿命は飼育下では約40年、野生では14年(H16生存中)。
- 日本産鳥類の中で最大級のもののひとつ。翼を広げると240mにもなる。
- 求愛ディスプレイ(他個体に対する誇示行動)の際には、まずオスが「クアー」と鳴き、その後メスが「カッカ」と鳴く。
- オスメスが抱卵を交代するときにも、くちばしを上に向け「クアー、カッ・カッ、クアー、カッ・カッ・・・」と鳴きあうという。
- 卵はいわゆる卵形、長さは(飼育下のもので)長さ9.6～11.1cm。(ちなみにニワトリのMサイズ卵で長さ5.6cmほど)
- 抱卵は3から7月、特に4～5月に行われるが、この間に何かの事故で卵が無くなると、直ちに巣につくのをやめ、だいたい2週間くらいで再産卵を行うという。ただし再産卵しないつがいもいる(特に時期が遅くなった場合)。
- 巣立ち後の給餌では、親は餌を運んできた際に「グルルルー」というかすかな音をたててヒナに合図する。また、ヒナが小さなうちにはくちばしからくちばしへ直接餌を渡すが、大きくなるにつれ、餌を子どもの前に置いて拾い上げさせることが増えてくるという。
- 冬は給餌を受けられる阿寒町や鶴居村など人里で群れを

作って越冬する。群れにリーダーやボスは存在せず、つがいやヒナ連れの家族単位で行動し、これに若鳥が加わるとい

いう。

■冬の夜は凍らない川の浅瀬を畴(ねぐら)とし、大きな群れとなって休む。

■2～3月頃親鳥は前年に生まれた子どもに対する給餌回数を減らし、一方で突く回数を増やして子別れを行うという。

■タンチョウの生存率は、①産卵数の70～80%がふ化、②ふ化数の22～36%(産卵数の17～27%)が10ヶ月生存、③10ヶ月齢のうち70%ほど(産卵数の10%ほど)が5年生存するという。



秋、河川敷の水たまりにやってきたタンチョウの家族

## 配慮事項

繁殖にはヨシなどの植生のある湿地が必要である。

### 参考文献

- 「タンチョウ そのすべて」正富宏之、北海道新聞社 2000
- 「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)
- 「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編) 中村雅彦・中村登流、保育社 1995
- 「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000
- 「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)
- 「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

- 「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978
- 「北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック2001」北海道 2001
- 「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

- 釜田美穂・富岡辰先 (1991) 北海道鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリにおけるタンチョウの家族群の解消過程. Strix, 10 : 21-30.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ